

帝国解体後のロシア（01・5・24）

枝村 純郎（昭24修文中）

はじめに

ご紹介頂きました枝村で御座います。実は、先週の水曜日に風邪かと思つて掛り付けの医者に相談しましたら、肺炎と診断され病院に担ぎ込まれました。本日は外出許可をもらつて、こちらへ参つたという次第です。

今日の演題は私が選んだのではないのです。私はもうちよつと別の話をしようかと思つていたのですが、案内を頂いてみたら、「帝国解体以後のロシア」と書いてありましたので、ああそうかと思つてお受けしたのです。今外務省はいろいろやられています。特に対ロシア外交はちよつと変調になっています。大蔵省バッシング、警察バッシングといろいろあつて、とうとう外務省に來た。しかしこれはいろいろ複合的な症状で、私の肺炎のよゝうに簡単ではなくて難しい、田中真紀子大臣が來たということです。面白くなつて來

て、ワイドショーなんか大喜びですけれども、現役 of 職員は本当に気の毒だと思います。しかし、対ロシア外交は外務省自身がごたごたしているときでも、余程しつかりやってもらわないといけない。特に三高の先輩諸氏のようなオピニオンリーダーといえる方々には現在の対ロシア外交というものをよく理解して頂くことが必要だと思います。そんな意義も感じて来たわけでありますので、よろしく願います。

プーチンの登場

対ロシア外交の話をする前に、今日の演題に従って、少しプーチンのロシアということについてお話ししたいと思うのです。私は「帝国解体前後」という本で一九九四年まで書いていますので、本来であれば「帝国解体以後」と言いますと、その頃にさかのぼらないといけないのかもしれませんが、それでは話が長くなり過ますから、エリツインの末期から話を始めようと思います。末期のエリツイン大統領ほど、内閣の首相というか自分の右腕をどんどんどんどん取替えた人はいないのです。チェルノムイルディンという、ガスプロムという天然ガス公社の総裁をずっとやっていた人ですが、これは首相を五年ぐらいやりました。その後のクリエンコという若いエコノミストは、九八年三月から五か月しかもたなかった。その次はブリマコフ、この人はゴルバチョフ時代にも政治局員をやっていて、

日本とも関係の深い人です。この間も日本に来て、私も会いました。この人は兎に角したたかで、ゴルバチョフ時代要職にいたあと、エリツインのときにはKGBの後身の防諜機関の長官をやった。この人が首相をやったのが八か月。その後のステパーシンは三か月しかもたなかった。そこで九九年の八月九日になって、当時安全保障会議事務局長だったプーチン、まあ閣僚クラスとっていいポストにいた人、むしろインナーキャビネットの人とっていいでしょう、それが首相に拔擢されたのです。

この人は私も知りませんでした。知らないのは、実はおかしいのです。レニングラード、今のサンクトペテルブルグです、そこには私は何度か行っているのです。特にサブチャツクという前の市長の時代に、私は一人でも行きましたし、中山大臣にお供しても行きました。その頃はプーチンは第一副市長をしていたので、当然色々ところで顔を出していたと思うのです。外務省は九五年の二月に、彼をオピニオンリーダーということで訪日招待をしているのです。だから、外務省は先見の明を誇るべきだと思うのですが、どんな男だったか誰も思い出せない、そんな人です。まあそうやって記憶されないところがKGBの一つの特技なんだそうです。とにかくKGBのキャリアーで、柔道も覚えたり、ライブチツヒを中心に東独に長く在勤していましたのでドイツ語も流暢で、KGBのたたき上げという人です。しかし誰も知らなかった、ロシア人もあまり知らなかった。

そこでこれは、またキリエンコ、プリマコフ、ステパーシンと同じような使い捨ての首相ではないかという懷疑の目で人々は見ていた。ですから八月に彼が首相になった当時に行われた、誰が次の大統領になるだろうかという世論調査で彼が得た得票は、僅か二パーセントだったのです。その頃は、モスクワ市長のルシコフなんかの人氣は非常に高かったし、プリマコフも首相としてかなり名を売っていましたから、こういう人達の方が評判が高かった。プーチンは僅か二パーセント。ところがそれが鰻登りに人氣が出たのです。その数字を申し上げますと、九月が一五パーセント、一〇月が二五パーセント、一月になると四〇パーセント、一二月四五パーセント、年を越して一月には五五パーセント、二月六三パーセント、そんなことで、その後は大体七三パーセントあたりで安定している。一番最近の数字をみましたら七四パーセントです。日本では小泉ブームがありますが、ただ、小泉さんの場合は自分も八〇パーセント以上というのには、あんまり自信が無くて、そのうち五〇パーセントが保てればいいな、なんて言っているようです。

プーチンの場合、どうしてこんなに人氣が急上昇したかというと、今回の第二次チェチエン戦争です。第一次はエリツインのときに、九四年から九六年、殆ど二年に亘って泥沼のような内戦をやった。このときは国際的にも国内的にも評判悪く、やっとレベッジという、大統領候補にもなったことのある将軍が登場して和平工作をして、ようやく収めたと

というようなことでした。今回また、同じ戦争をおっはじめたのに、それがどうして人氣のもとになったかと、それがまた不思議なのですが、やっぱりロシア国民の保守的、国家主義的な傾向、それが強まっているという最近の情勢が大きな背景としてあると思います。

ロシアは嘗て世界に誇る核大国であったのが、一九九八年のロシアの金融危機で、世界中に経済的に行き詰ったという印象を与えた。九九年にはNATOのユーゴ空爆があり、自分の鼻の先で西側にいのようにやられて、それに対して十分な対抗措置がとれない。政治的、経済的に如何にロシアが脆弱であり、欧米諸国の言うがままにされてきたか、そういうことに対する大変鬱屈した感情がある。私は若い頃に国連総会に出て、丁度サミット総会で、カストロが来たり色々あって面白かったですが、フルシチョフの演説も聞きました。彼が靴を脱いでばんばんと机をたたくのも見ていましたが、そのときにフルシチョフが、米国なんかには直ぐ追付いてしまふ、兎に角ロシアはロケットをソーセージのように作っているのだからと言うのです。フルシチョフの時代はそんな勢いだったのに、今のロシアはGDPでいうとシカゴのあるイリノイ州と同じです。それが核を持っているというので、「核を持ったイリノイ州」だと思えば分ると言う人がいるぐらいです。

最近ファインシュアルタイムズを見ていましたら、さつき申し上げた保守回帰といいますか、昔なつかしの感じが如何に強いかが書いてありました。ロシア人で七九

パーセントがソ連邦解体、帝国解体は間違いであったと言っているのです。九二年には六九パーセントであったのが更に一〇パーセント上昇している。最近プーチンがやったロシア国歌の曲としてソ連時代のものを採用するとか、軍旗はソ連時代のもを使うとか、まあそういうことに象徴されるような国民の風潮があるのです。

それともう一つ直接的には、第一次チェチェン戦争の和平条件に不満があった。これはレベッジという先程言いました將軍がアレンジしたのですが、これによると二〇〇一年までにチェチェン州の将来を決めるとなっていますが、しかしその将来については非常に色濃く独立という線が出ています。これに対してロシア国民の反撥があった。そこへ丁度プーチンが首相になった一九九九年の八月に、チェチェンの軍事勢力がダゲスタンという隣の共和国に侵入するのです。

それだけならまだいいのですが、九月にモスクワで一連の爆発事件が起った。アパートが九月の九日、一三日と相次いで爆破されたのです。地震がない地域ですから日本のマンションほど頑丈にできていません。急所をガンとやると瓦解してしまふ。ですからわずかに二つの爆破事件で三〇〇人からの死傷者が出た。これがチェチェン人のテロ行為によるものだという事になった。これは一〇パーセント確実という証拠は必ずしも無いと私は理解していますけれども、そういう事になって、絶好の大義名分がプーチンに与えられ

たわけです。

九月二九日にテロリストの殲滅ということを大義名分に、チェチェン侵攻を当時のブーチン首相が音頭を取って開始するのです。これは湾岸戦争のアメリカとか、NATOのユーゴー空爆のように、なるべく地上兵力は使わない、空軍力と火力でやっていく、ただ、ロシアの兵器はNATOやアメリカほど精密ではありませんから、どうしても一般民衆の被害は大きかったわけですが、それほど大きい犠牲をロシア軍側は出さなかった。チェチェン人の方もそういう戦争をやるに損ですから、さっさと引揚げて二〇〇〇年の二月には首都のグロズヌイも明渡しして山にこもったということなのです。

ロシア人には、よく言われるように「強い腕」願望というものがある。所謂「強いご主人様」、ロシア語で言うところの「クレプスキー・ハジャーイン」というのですが、そういったものが、農奴社会であったツァーリストの時代からの伝統として、国民性の中にあるのです。それがブーチンの登場で、まさにそういう力強い指導者がやって来たというのが一般ロシア国民の受取り方で、人気が上がったということです。

このことを世界中で一番喜んだのは誰か、それはエリツィンだと思います。長い間独裁をしたり、権威主義的な政治をやって来た人間が一番こわいのは辞めるときなのです。なかなか辞められない、一つには周りが辞めさせない、日本でもそうなのです。

既得権益というものは一度できますと続きます。政治家の後援会組織というけれど、あれは後援会であると同時に、利益があるから後援するのであって、そこはギブアンドテイクがあるからやっているのです。だから、代議士が死ぬと同じ名前の人間であれば誰でもいいのです。ほかに優秀な人がいても後援会が許さない。やっぱり故人と同じ名前を持っているといけない。代議士が亡くなると息子になる。息子が亡くなったらその奥さんになる、そんなことで二世議員が多いのです。

外国でも同じで周りが先ず辞めさせない。それから自分もこわくて辞められなくなってくるのです。つまり辞めた後がこわい、それは殷鑑遠からず、スハルト大統領の例があります。私はインドネシアに二度在勤して、大使もやりましたが、私のいる頃にそろそろ辞めたらいいのになあ、今辞めれば「開発の父」、インドネシア語で言えば、「ババ・プンバングウナン」ということでもはやされて名を残し、何とかぎりぎりそう恨みを買わずに辞められるのではないかと思っていました。けれども、ファミリービジネスにのめり込んでしまった。マダム・チェンが夫人で、この人が最初にビジネスをやった。みなマダム・チェンと言わずにマダム・チェンプルチェン、「一〇パーセント夫人」と言う。一〇パーセントの口銭を取るという意味です。それから始めて、トミー、バンバン、シギットの三人の息子がファミリービジネスを持っていて、三人をまとめてトーシバというのです。何

でも彼等を通さないと事が進まないという状況が生まれた。そうするとそれにたかる連中が出て来ますから、ますます辞められなくなる。だから自分に忠実と思われる人間を選んで自分の後を確実にするという事で、ハビビを選んだわけです。彼は十数才の頃からスハルトに可愛がられて来た人ですから、これならいいかと思つたら、ハビビも自分の身が可愛いから、スハルトが辞めた後なんとなく煮え切らない、それと力が無い、だから駄目になつてしまつた。

こういう場合、後任を選ぶには二つの条件が必要です。一つは力があること、もう一つは辞める人間に忠実であること、エリツインの場合はこの二つの条件を満たす奴は誰かというので、先ずキリエンコを試し、プリマコフを試し、ステパーシンを試して、結局落着いたところがプーチンなのです。前者の三人で言えばキリエンコとステパーシンは力がなから駄目ということで落第した。プリマコフは力がありそうだけど自分には忠実ではないだろうということのでけにした。ところがプーチンは幸い丁度うまいこと両方を兼ね備えていたというわけです。そこで二〇〇〇年の六月までは、エリツイン大統領の任期があつたのですが、電撃的に一二月の三十一日の夕方に、自分はここで辞めますということを発表するのです。

そうすると自動的に憲法の規定で首相が大統領代行になる。三か月以内に大統領の選挙

をやつて、圧倒的人気で当選するわけですが、これは絶好のタイミングです。プーチンの人気が上り調子だというだけではなくて、一九九九年の二月三十一日の夕方にやったのもまたうまい。というのは、つまり新しい年、新しいミレニアム、若い新しい指導者のもとで新しい希望をもってロシア人が迎ええられる、こういうことで、エリツインは今のところうまいこと生延びているわけです。

プーチンの業績

プーチンが最初に大統領代行布告第一号として、何をやったかといえばエリツインの身の安全の確保です。在任中のことについて刑事訴追はされませんでした。それから功労賞を与えたり、高額の年金を与えたりしました。更に必要なときは大統領専用機を使つてもよろしいという特権も与えたのです。エリツインは早速それを使つて一月でしたかエルサレムに海外旅行をするのです。

そんなことでプーチンの売物は力強さと若さです。四七才で柔道までやってみせるのですから。そうして「強い国家」を標榜した。これが彼のスローガンのナンバーワンです。これは二重の意味がありまして、一つは国民のために何かが出来る力を持った国家、それを作りたい、これは正当なものです。もう一つはKGB的な発想とか、国民の保守的傾向

への回帰ということを先程から言っておりますが、それもあつて權威主義的な国家を目指すということ。そのどちらの意味がより強く出てくるのか、そこらが見所なのです。私は頼まれて去年の一月一七日に日経の「時論」に書きましたけれども、そのときに私はブーチンはうまく行くだろうということを書いたのです。

それは議会がエリツインの時よりはるかに御しやすくなっている。エリツインが一番手こずつたのは議会です。一九九三年秋には、私はモスクワ川をへだてて議会の対岸にあるウクライナホテルから見えていたのですが、とうとう戦車で議会を砲撃するほど議会との関係が決定的に悪かった。

ところが先の議会選挙でかなりの勢力を「統一」という彼の与党が得たように、与党の勢力が最近どんどん強くなっている。何しろ「強いご主人様」指向ですから、本来政敵であつたルシコフ、もとのモスクワ市長とか、自分が罷免したプリマコフ元首相だとか、その率いる「祖国我がロシア」という政党、これも強い勢力なのですが、それも与党化しているのです。共産党ですらは是非々々ぐらいのところまで来ています。

そんなことですから、これまで政治的に一番の癌であつた議会をコントロールできることは非常に強い。それから時々言うことをきかない知事がいるのですが、これは全国を七管区に分けて、そこに大統領の全権を置いて、知事はその下に従属するという形にし、且

つ大統領が何時でも知事を罷免できる、そういう法律を作ってしまったものですから、大統領の力が全国に及ぶようなネットワークも出来た。

政治的にはそういうことでおさえる。それから経済は石油価格の値上りがあり、これは資源大国のロシアですから、非常にプラスになる。それからもう一つは先程お話しした九年のルーブル切下げ、これはロシアにとつては屈辱的なことでしたけれども、これがプラス効果が出てきた。つまり輸入代替という効果が出てきたのです。私は数年前に極東地区の在外公館の査察で行ったときに、近くのマーケットを見に行つてびっくりしました。

何とスペインのチョリツソというソーセージを売っているのです。ロシアだってちゃんとソーセージはできます。それなのにユーラシア大陸の一番西のスペインから一番東の端の極東ロシアまでソーセージを運んで来て、それで売れるというのは不思議な現象です。ところがルーブルが四分の一、五分の一に減価したことによつて国内産品が競争力を持つてきましたから、そこで景気が良くなつて来た。こういうことなのです。ですから、これはロシア始つて以来のことなのですけれども、去年はロシア経済は八・三パーセントの成長を遂げたのです。

それともう一つ、皆さんお聞きだと思えますし、これに触れないわけにはいかないは、オリガルヒアという所謂新興財閥です。これはソ連解体の後、民営化ということで国営企

業をどんどん整理していくときに、うまいことやってそれに乗っ取った連中を主体にしています。これはディバイド・アンド・ルールといいますか、ある奴は味方にし、ある奴はやつつける。言うことを聞かない奴、特にメディア関係、報道機関を握っている者はたたく。特に話題になっているのはグシンスキーという男です。これはロシアで民間テレビとして唯一つ生残ったNTVのオーナーです。これを訴追したことでグシンスキーは今スペインに逃げています。

そんなことで兎に角、この一年を総括すれば、何をやって来たかといえば、力を自分に集中することです。その力を使って、さっき申しました何れのの道にロシアを導いて行くのか、本当に民主的といいますか、市場経済といいますか、繁栄にもっていくのか、ひょっとするとこれだけメディアまでコントロールしてしまうと、権威主義的な方向に行くのではないかという、そこらのところに不安があります。これは絶対的にどっちの道ということを確認をもって予言している人を今のところ私は知りません。

このように、今までは順調に來たのですが、大きく言って二つ危ないところがあると思います。一つはチェチェン戦争です。先に申しましたように第一次チェチェン戦争はあの泥沼のような状態に陥った。第二次戦争はうまくいっているように見えますが、プーチンはすでに今チェチェンに投入している八万人位の兵力を、二万五千人に減らすと言出して

います。しかしひょっとすると山に逃込んだチェチェンの軍事勢力は、それを待っているかも知れない。彼等も勢力を温存しているし、アフガニスタンのイスラム過激分子との繋がりもあり、十分な補給は受けています。決して彼等が弱っているということはないのです。そうなたらばと出て来る。チェチェンのなりゆきというのが難しいところです。

もう一つは今年の経済です。石油価格は下がり気味ですし、ルーブルの切り下げ効果も出尽したという感じで、GDPはプラスになればいいが、横這いかなという感じで、その辺のところが難しいところだと思います。

(二〇〇一年十一月 追記)

九月十一日に発生した同時多発テロの最大の受益者は、ロシアであり、プーチンであると、フランスの国際問題研究所のモイジー副所長が言っています。チェチェン戦争も反テロ闘争の一環であるという評価を受けてロシアの国際的地位は向上し、また、タリバンの後ろ盾を失ったチェチェンの武装勢力は弱体化するだろうからです。なお、経済についても二〇〇一年の前半は年率五・五パーセントの成長を記録し、懸念されたような急激な落ち込みは今のところ見られていません。

対口外交

これが帝国解体以後のブーチンのロシアの現状ですけれども、そのように保守的傾向を強めている国民を、KGBの経験が唯一の経験である大統領が率いているロシア、これを相手に領土交渉をやるといふことなのです。日露関係は今までは、「ボリス・リウウ」という橋本総理とエリツイン大統領の間のような個人的な関係で支えられて来たので、これが無くなると危ないのではないかと言われた。それに対する答として日経の「時論」に書いたのですが、私は交渉の枠組は既にすっかりできているのだ、東京宣言というものできているのだ、だからそういうことは心配ない。一九九三年エリツインが来たときに合意した東京宣言を大切にしていけば間違いないということを書きました。

ブーチンになってからも、大筋では大体その方向で行っているので大丈夫かなと思っていたのですが、ところどころで変な兆候が出て来たのです。例えば去年の七月、野中広務当時の幹事長が対口外交について領土問題にこだわらず、とりあえずは友好を進めて友好条約でも結べばいいではないかというようなことを、何かの拍子にひょっと口にした。

外務省は、今までは政治に巻き込まれることは、比較的少なかった役所です。戦後の冷戦構造のなかでは、与党と野党のイデオロギー的な対立がはっきりしていましたし、外務

省も、大筋でいえば、与党の親米、反ソの路線を支えていれば良かった。しかし、今の状況はより複雑で、残念なことに、まさかと思うような金銭的なスキャンダルも起こるし、自民党の党派がらみの対立が、対口外交にも影響しているというようなことが言われるようになってきている。それが、四島一括返還か、二島先行返還か、というような路線の対立として報じられ、さらには、それが課長レベルの人事にまで影響しているとさえ言われるようになってきている。

私どもは、そういう外務省の状況に歯がゆいものを感じて、いろいろ雑誌や新聞などに意見を発表しますが、現役の職員から「自由に物の言える先輩は羨ましいな」というようなことを言われるくらいです。現役の人は、こういう難しい状況の中で、よく頑張っていると思いますが、一日も早く、政治と外務省の官僚組織との関係が正常化して、まともな外交ができる体制に戻ってもらいたい、と願うばかりです。

ロシア外交について言えば、とにかく、何を交渉の基盤に据えるかということについての意思統一が計られることが急務です。

プーチン大統領は沖縄サミットで日本に来て九月に公式に訪問しました。この時の準備状況については私が心配することは何も無かった。東京宣言、さつき申しました一九九三年の東京宣言、どうしてそれがそんなにいいものかということはあとでお話しますけれど

も、これが全ての基礎であって、例の二〇〇〇年までに平和条約を結ぶというクラスノヤルスク合意などというのもそれに基づいているのです。大体その線で準備されておった。安心していたのですけれども、やっぱりプーチンはKGBでしょう。そういう事務的に準備した従来の路線だけでは満足しない、ほんと置土産を置いて行っただけです。

それは何かというと、一九五六年の日ソ共同宣言は有効であるということを言って行っただ。私はそんなことは当然だと思いました。この宣言は日ソ両方の国会が批准承認しているものですし、私がいるときにも一九九三年訪日したエリツインが、それが有効であることは認めている。別にそんなに喜ぶこともない。それで訪日の後、担当の欧州局長がある所で講演したときに私も聞いていましたが、そのとき彼が言ったのは全てシナリオ通りだった、ただ唯一シナリオに出ていなかったのは、プーチンが一九五六年の日ソ共同宣言、これによって両国関係が正常化されるわけでありますが、それが有効だということを認めたことだったというのでした。その時の局長の口振りからして、それはそう大して重要視していないなあと、それならいいなあと思っていたのです。

ところがどういうわけか、それから後の交渉に今度は五六年共同宣言を交渉の基礎にしましたのです。一体交渉の基礎に何を選ぶかは、ものすごく大切なことなのです。今までは九三年の東京宣言という確固たるものがあつたはずなのに、それを五六年の共同宣

言に切替えたことは重大です。

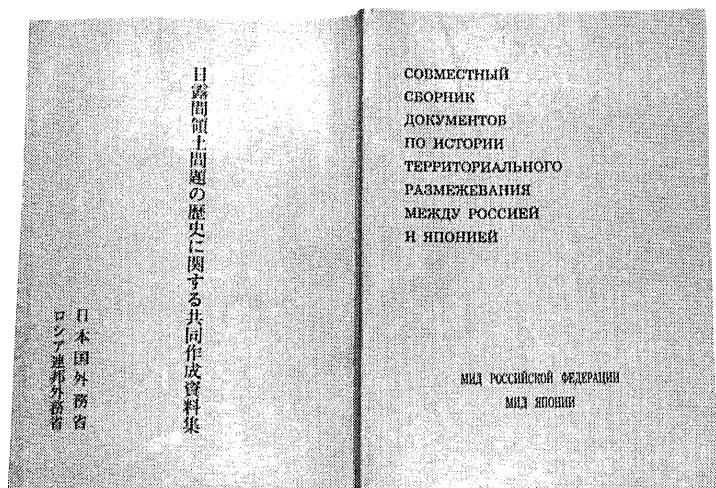
皆さんはサーティーン・デイズというキューバ危機の時の映画をご覧になりましたか。

これはロバート・ケネディの回顧録を忠実に再現したものです。私が一番印象に残ったのは、あのときフルシチョフから手紙が二つ来ます。一つは一〇月二六日付で非公式のルート、K B Gのルートで来るのです。翌日に今度は公の外交チャネルを通じて、しかも公表されて来るのです。しかし前の方が妥協的な内容であつたけれども、後の方は厳しい内容で、トルコにある米国のミサイルを引揚げなければ駄目だということをはっきり書いています。国務省はこれが公式だからといって当然のようにそれに対する返事を用意して来るのです。ところがケネディ兄弟はそれはやめて、前の二六日の非公式の内容のいい方の手紙に返事を出すことにするのです。それをフルシチョフが受止めて、ここで交渉の共通の基盤ができたのです。

だからこれは交渉学というネゴシエーションズに関する学問というデイスプリンがアメリカにはできていますが、その教科書の中でも非常に適切な判断であつたと書かれています。交渉の基盤として形にとらわれずに、内容のいいものを選んだということが適切な判断であつたとされています。このように交渉の基盤に何を選ぶかということは非常に大切なのです。

その意味で一九五六年の共同宣言を選んだというのは、これはちょっと危ない、ちょっとならず危ない。しかもこの一九五六年の宣言をものすごく持上げているのです。森総理とのイルクーツクの共同宣言のなかで、これが国会でも批准されており、基本的な法的な文書だということで持上げている。そこらへんにブーチンの二島だけ返してあとはちらにしようという底意が、私なんかには見えるのです。そうやってどんどん五六年の共同宣言を持上げていく。それは非常に怖いことだと私は思っているのです。

もっとも、基本的な法的文書というのはこれは確かにそうなのです。日ソ関係を再開した、回復したという意味では基本的な文書です。だけれども元々はそれは平和条約を結ぶために交渉してきたけれど、領土問題について交渉がうまくいかないからというので、やむを得ず共同宣言に切替えた。だから五六年の共同宣言に書いてあることは要するに、領土交渉は一方では続けましょう、齒舞、色丹は平和条約ができたら返しますとこういうことで、領土問題についてはそのときのやっと到達したぎりぎりの合意を書いているに過ぎない。イルクーツクの宣言に言う領土問題についての「将来に向っての出発点」だということほどの積極的な意味合いをこれに与えることは「基本的法的文書」というものの意味をすり替えているのです。そこいらがKGB的な発想の巧みさなのです。こんなのに乗る奴がいるかと思ったら乗っちゃたのです。だから自由にものが言える我々先輩が大いにがあが



共同作成資料集の表紙

あ言ったわけです。

東京宣言

どうして我々が、それ程東京宣言にこだわるかということ、ここに東京宣言が出て来るわけです。東京宣言のなかの領土問題に関するところですが、四島について真剣な交渉を行った結果、「双方はこの問題を歴史的法的事実に立脚し、両国の間で合意の上作成された諸文書、及び法と正義の原則を基礎として解決する。」それによって平和条約を早急に締結すると謳っています。それともう一つ重要なことは、この後から二つ目のパラグラフに「日本国政府及びロシア連邦政府はまたこれまで両国間の平和条約作業部会において建設的な対話が

行われ、その成果の一つとして、一九九二年九月に日露領土問題の歴史に関する共同作成資料集が日露共同で発表された。」と書いてあります。

この資料集は上の写真のように立派な本になっておるのです。表紙の写真で判りのように、資料の日本語版とロシア語版が一冊にまとめられていて逃げられないようにうまくできています。これがどうして非常に重要かというと、一つは例えば第六項目に収録されているニコライ一世のプチャーチン提督あての訓令です。一八五三年のこんな古い文書をどうして共同資料集に掲載したのか。その真ん中辺りに、「領土の問題については可能な限り寛大であるべきだ、何故なら通商上の利益というもう一つの目的の達成こそが我々と真に重要性を持つからだ」と書いてあります。

つまり国境問題に関しては柔軟でよいと言っている。開国させる、日本を開くことが一番大切なことから、国境はどうでもよいと、こう言っているのです。だからクリル諸島のうちロシアに属する最南端はウルップ島であるといつかまわらない。これにより事実上既にそうであるように、我が方は同島の南端が日本との国境となり、日本側は択捉島の北端が国境となる。それでよいということ、ニコライ一世はプチャーチン宛に既に一八五三年に訓令を出しているのです。

どうしてこれが重要かと言いますと、それはロシア側の古文書で、しかも内部文書です。

それを両国外務省が連名で出す文書にわざわざ収録したということは、これは歴史的法的事実として重要であるということを、両国の外務省が共通の認識として持ったということです。だから非常に重要だということです。

また面白いのは、この緑の本の最初の序文です。これを見ますと二つ目のパラグラフですけれども、「クリル諸島への日本人の進出が南から、ロシア人の進出が北から行われた結果、一九世紀半ばまでに択捉島とウルップ島との間に日露の国境線が形成された。」つまりそこに自然に日露の国境ができてしまっていた、とこういうことです。さらに「一八五五年二月七日付の日露通交条約（下田条約）によって、この国境線が法的に確定され択捉島、国後島、齒舞島及び色丹群島は日本領、ウルップ島以北の諸島はロシア領として平和裡に確定した。」とも書いてあります。しかも「一八五五年の日露国交樹立以降、択捉島、国後島、齒舞島及び色丹群島の帰属がロシアにより問題にされたことは一度もなかった」ということも、わざわざ断っている。これは我々がかねてから言っている北方四島は日本の固有の領土だということを両国の外務省が共通の認識として序文に書いていることにはかなりません。しかも、序文の末尾には日本国外務省と並べてロシア連邦外務省とはっきり書いて文責を明らかにしているのです。

東京宣言は、まさにこういう重要な日露双方が協力して作った資料に言及しながら、

「歴史的法的事実立脚し」とこう言っている。それを日本の学者なんかでも知らない人があるのです。

マスメディア関係者でも、東京宣言を本当にちゃんと読みこなしているかという疑問です。特に第一線の記者がちゃんと読んでいないと駄目なのです。デスクがちゃんと理解していないと駄目です。いくら論説が知っていたって駄目なのです。そういう無理解が記事に反映されてしまうし、見出しに反映されてしまう。だから東京宣言がそこいらにごろごろ転がっているがらくたと同じように「法と正義の原則に基づく東京宣言」という程度に扱われているのです。

東京宣言はこれだけ深い意味合いがある、今日はそのなかのある一点だけをとらえて申し上げているのですが、東京宣言を今後の北方領土問題の枠組として進むべきである、そのことをよく認識して頂きたいと思います。以上申し上げたことで、東京宣言の重要性はお判りいただけると思います。我々はこれを作るために大変な苦勞をしたのです。それなのにこの間の予算委員会で、「今までの日露間の合意した文書に基づいて」とは何ですかと野党の議員が質問したら、「それは一九五六年の日ソ共同宣言と一九七三年の日ソ共同声明であります」と、かの人気の高い田中真紀子外務大臣が答弁しておられるのです。これでは、一体我々何して来たかということになります。国民の税金をもらって我々は一所

懸命奮励努力して来たつもりですが、その成果を大臣が認識していません。質問した方もあつけにとられて、じゃ最近ロシアとやったことは何だったのですかと尋ねましたが、その野党の議員は随分紳士的な人で、それ以上追求せずに止めました。また、プーチンが何か言ったからといってそれにわつとどびつくようなことは、軽率なことであり、残念なことです。恐らく田中真紀子さんも一九五六年共同宣言を基礎にするということとは止めるものと期待します。止めると期待しますが、そこには外交の継続性という難しさがあつて、どういう風にそれをうまく收拾するか、よく事務当局の言うことも聞いて、しっかり頭を整理して、論理的な思考をすることが絶対必要であり、十分慎重に真剣に取り組んで欲しいと思います。

兎に角、日露交渉の基礎として五六年の共同宣言でやっていくと、危ない橋を渡ることになります。日本の新聞では「法と正義の原則に基づく解決をうたった東京宣言」と括弧で簡単に書きます。一九五六年の日ソ共同宣言は何かというと「二島返還を定めた」という簡単に言う。だけど、この共同宣言にしたって、二島返還だけを定めているのではないのです。領土問題に関する第九項はちゃんと「平和条約締結交渉を継続することに同意する」ということも謳っている。その平和条約締結交渉は何かといえば、その後のゴルバチョフの訪日以来、最近のイルクーツク合意に至るまで、四島の帰属問題を解決することが

平和条約を締結する前提だと謳っています。そこらのところをやはり第一線の記者とかデスククラスがしつかり頭にたたき込んで、それで簡単に「二島返還を定めた一九五六年の日ソ共同宣言」などという言い方は是非止めて欲しいと思うのです。他の二島のこともちんと書いてあるのです。

日本が、こういうことをやっていますと、まさに向うの思うつばになって来るのです。二島は返しでしょう。しかしそれでおしまいですよと言うに決っているのです。二島返還とちよつと言つても、ばつと反対が出るのが、今のロシアの雰囲気ですから。それだつて彼等にとつてかなり勇気のいる発言だと思っていますから。それで感謝しない奴は悪いと本心から彼等と思います。そういう雰囲気を作った上で、日本側が二島では駄目だよ、それは四島だよと言つた途端に、向うが何をやるかと言えば、やる危険があるかと言えば、一九五六年日ソ共同宣言は、日ソ間、日露間の基本的な法的文書だと、これはイルクーツクでもちゃんとうたっているだろう。それに基づいて二島を返して平和条約を結ぼうと言うのに、日本側はこのジェネラースなオファーに対してばいと蹴つてきた。交渉を止めてしまった。これはけしからんと、これはものすごいプロパガンダをやるに違いない。

一九九二年にエリツイン大統領が訪日直前に、訪問を延期したことがありました。あの時に謝るかと思つたら、謝りはしない。悪いのはかたくなな態度をとつた日本側だとい

ふうなことを言う。エリツインが宮沢さんに延期を申出る電話をして来たとき、私は総理官邸にいました。そのとき宮沢さんは非常に立派で、ロシア側には事情があるかしらんが日本側には何の事情もありません、日本側は何時でも貴方の訪日をお受けするつもりだった。こういうことをきちつと言われた。それからもう一つ立派だったのは、国賓のホストはあくまで天皇陛下ですから、今夜は遅いけれども明朝早速天皇陛下に御報告しましょうと言われたのです。エリツインは日本側に対しては何のクレームもありませんと、そのときは言ったはずなのです。

それで私はモスクワに帰ってから、当時の外務大臣コズイレフに会いに行きました。そして彼が、大使お互いに批判するのはよそうと言うものですから、結構です。我々は別に批判していません。しかし君の方が批判しないというときに、その中には大統領自身を含むものか、或は大統領報道官、大統領府も含むものかということ念を押したのです。けれども、そうなるとコズイレフはえらく歯切れが悪かった。大統領を押える自信がないのです。だからそういう、お互いに批判しないという合意があったのに、エリツインは言いたい放題言うのです。それとその時のコスチュフという大統領報道官も悪かった。エリツインも、何の間違いか知りませんが「私はゴルバチョフのような目に遭いたくない、学生に追われて地下室に逃込むようなことには遭いたくないから止めたのだ」というような

ことを言う。日本の安全体制が十分でないということを書いてわけですが、それに加えて怪文書を流すのです。

またそれをハーフ・トルースとはうまく言ったもので、宮沢さんがお酒がお好きだということもちゃんと押えているのです。エリツインが電話したときには、宮沢さんは酔っぱらって電話に出られないような状況だった。だから韓国に先に電話した。というようなことを流す。宮沢総理は全然そんなことは無かったのです。それは私も現場を見て知っていますし、そのときの酒席にたまたま一緒にいた住商の前の会長だった伊藤さんなんかも、そんなに酒は飲んでいないと言っています。全然そんなことは無い。さっき申しましたように立派な対応だった。しかしそういう怪文書を流して、何とそれに時事通信が引っかかっているのです。だから世界週報にちゃんとそれが出ている。今の酔っぱらった云々の一番ひどいところは採録していませんけれども、要するに採録しているのは、日本側が渡辺外務大臣始め非常にかたくなであったために訪日を止めざるを得なかったという部分です。自分の方が悪くても、それぐらいのことをプロパガンダをやるのですから、その点は注意しないといけない相手です。

自分の方に三分か四分の利があれば、我が方は、五六年共同宣言に基づいて二島を返すと言ったのに日本は断ったということであれば十分な宣伝工作をやれる。私はフィナンシ

ヤルタイムズやヘラルドトリビューンなどは目を通しており、その他の欧米の雑誌などを見ていても、そういう世界のメディアだって、日本の領土問題に対して理解は無いです。日本というのは本当に発信能力が低い。残念ながらこれは外務省だけの責任ではありません。日本全体の責任です。

実は、日本の発信能力を如何に高めるかというソフトパワーの話を六月二〇日に学士会館で行います。それは一〇月一五日発行の学士会報八三三号に「冷戦後の世界と日本外交」という表題で掲載されることになっています。興味のある方はそれをご覧下さい。

まあそんなことで、私は早く対口交渉を正道に戻すべきだ、それはやはり東京宣言に基づく四島帰属の問題の解決です。その正道に戻すことをやらないといけない。二島先行とか何とかというような変な小細工の話はもっと先でやればいいので、今頃からちよろちよろやる話ではないです。ですからその辺は、是非報道機関にも理解を得たいところです。何れにせよ一つ面白いのはブーチンが訪日した時の合意の中で、平和条約締結の重要性について両国民に説明することを約束している、このことは非常に重要な合意だと思うのです。というのはロシアの報道などというのは無茶苦茶なのです。

私は小淵さんが訪口した後の結果を報道するロシアの国営テレビのニュース番組を見ていましたが、非常に綺麗なアナウンサーですが、ロシアが折角一九五一年のサンフランシ

スコ条約に基づいて手に入れた領土を軽々に返すわけにはいきません、というような解説を読み上げているのです。ソ連が一九五一年のサンフランシスコ条約の当事者でなかったことは御承知のとおりです。今後はそんなことをやったら、今度は日本はお前あそこはブーチンが訪日時に約束したことで違ふよと、報道の間違ひを是正することこそ、平和条約締結の重要性を国民に知らせることなのだということが要求できるのです。そういうロシア側の報道ぶりをきちつとモニターし、それに対しておかしいことがあれば、ものが言える体制を日本側としては早く整えなければならぬと思います。

いろいろやることはあるわけであるのに、大臣は予算委員会で「次官が一人だとしつぱを出さないから」とか何とかと言つて事務当局の悪口を言う。他方ではいろいろなリークがあつて田中真紀子はこの危険なことをやっているよという話がどんどん出る。こういうことは非常に不幸なことです。且つこれは日本の国家構造そのものの危機です。というのは、我々は官僚組織に属していましたが、官僚組織は国民全体に対する奉仕者である。だから時の政治勢力に対して、癒着してはいけぬ、あくまで中立であり、それがまた我々公務員としての誇りであつたわけです。

ですから政治家である大臣とは一定の緊張関係がある、政治家は任命権を持っていますけれど、節度を持つてそれは使つてもらわねばならない。他方、私はロシアの大使をして

いるときに、自民党が下野して細川政権に変わりましたが、別にだからといって私は内閣に對する忠誠の姿勢を変えたこともないし、変えようと思ったこともありません。そこに外交の継続性もあり、官僚の中立性もあるのです。

ところが今のような節度のないことをやっていれば、これはうまくいく筈がない。そのところを誰もきちつと言わない。というのは日本にはエリートがいないのです。エリートがいればそのエリートをつぶすのが、日本国民の今や趣味になっているのです。その昔、三高生が肩で風切って京都を歩いていたが、今なら卵をぶつつけられます。あんな偉そうな顔をしやがって、エリート面をして何だ。そういう世の中なのです。どうしてかというところ、エリートは一般民衆よりも知恵があり大衆を主導し責任を持ってやる人間なのです。そういうものではないに、何となくワイドショー的な価値観が全体を押えている。非常に不幸な状況が今の日本の状況だと思います。いろいろ勝手なことを言わせていただきますがこれで話を終らせて頂きます。